

# 行政視察報告

総務文教委員会 永野慶一郎

令和5年10月31日(火) 岡山県奈義町

## 少子化対策について

奈義町は平成の大合併で合併を選ばず単独での「道」を選び、現在人口5,751人(2023.3.1現在)の町であるが、合計特殊出生率が令和元年に「2.95」を記録し、その後も高い出生率を現在も誇っている町である。

しかし、地方のどこの町でも起こっている人口の自然減は毎年平均50人ほどの減であるとのこと。(出生数 約50人/年 死亡者数 約100人/年)  
そこで奈義町では、大切なのは移動均衡と捉え転入超過を目指し様々な子育て支援に取り組んでいた。

まず一番は「なぎチャイルドホーム」での取り組み。

地域の方たちや保護者、保育士の方たちが「家庭的な雰囲気の中で育てほしい」という願いから始まった自主的な保育活動が行われており、親同士の交流の場にもなっているとのこと。また育児経験のある地域の先輩との交流もあり、子育ての相談やアドバイスいただいたりと、地域一体となって子育てに取り組んでいる様子がうかがえた。

また、「しごとコンビニ事業」の取り組みでは、育児中でフルタイムで働けな

い母親のために短時間の仕事を提供する事業を展開していた。最近が高齢者へのスマホ教室なども行っているとのことであった。

このような取り組みを行って、若い世代の移住・定住促進に努めているとのことであったが、やはり移住や定住していただくには住むところがないと困るということで、住む場所の提供にも現在力を入れているとのことであった。

本市においても働く環境や住環境、すべての面で環境を整えるよう努力していかなければいけないと思った。

視察の冒頭での奥奈義町長のご挨拶の中で、「奈義町は子育て支援だけに力を入れているように見られがちだが、実は少子化対策こそが最大の高齢者福祉になる。」「私たちはマラソンランナーではない。駅伝選手なんだ。マラソンのように往って終わりではなく、次の世代へ繋いでいかなければならない。」という言葉聞いたとき、まさしくその通りだと共感を覚えることであった。

金銭面だけの子育て支援では少子化対策にならない。

子育て世代を精神面でも支援し、また「**地域一丸**」となった子育て支援が本来の少子化対策に繋がっていくものと強く思うところであった。

令和5年11月1日(水) 岡山県西栗倉村

## 百年の森事業・ローカルベンチャーの取り組み

奈義町同様、合併しないことを選んだが具体的にどうやって行くか考えていなかったが、現在の取り組みのキーマンとなる前村長が百年の森構想をスタートさせた。この構想を実現するために、前村長は村内の12集落を3巡して住民に説明したとのことで、前村長の強い思いでスタートした事業と言える。

村の木材を山主から高く仕入れて、高く売れる(付加価値をつける)商品を開発するベンチャー企業の取り組みにより山主にも還元できているとのこと。

2006年に始まったローカルベンチャーも現在52の事業が生まれ想いのあ  
る若者が起業できる環境が整ったことにより移住者も増え村に活気が出てきた  
ことをうかがえた。

また、ローカルベンチャースクールという都会で起業したい人を村で起業してもらい取り組みも行っており、地域おこし協力隊の制度を活用し現在村には51名の地域おこし協力隊がいるとのことで、本市でも枕崎の素材を生かした事業を起業したいと考える方たちの受け皿を構築し、移住・定住に繋がる協力隊を募集してはどうかと考える。

担当の方の話の中で一番印象に残ったのが、IターンよりUターンを増やしていきたいと。なぜなら地域の伝統を継承していくためには地元出身の人に帰

ってきてもらいたいとの理由であったが、I ターンの若い人が多くなると U ターンの若い人たちも村に帰ってきやすくなるのではとのことであった。

私も常々思っていることで、例えば若者の多い職場には若者が集まる傾向があると感じており、町も一緒に若者が多い町には若者が集まりやすいと考えるので、やはり I・U ターンともに増えていくような大胆な政策を取らなければいけないのではないかと再認識させられた。

奈義町、西粟倉村の取り組みを聞かせていただいたが、2つの町に共通するのは、住民が一体となった町をあげての一大事業（プロジェクト）の実現。

また、働く場や子育て、住環境の整備まですべて整っているという点が、全国でも注目を浴びる要因だと感じた。

本市も何か目玉となる政策を打ち出して、地域の方とともに誰も取り残さないまちづくりに取り組んでいかなければいけない時期に来ているのではないか。